神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

「インディアンは必ず勝つ」—『アバター』の比較社会論的考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): Avatar, Comparative study of societies, Primitive society, Modern society 作成者: 田中, 敏彦, TANAKA, Toshihiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2077

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「インディアンは必ず勝つ」―『アバター』の比較社会論的考察

田中　敏彦

目次

（1）はじめに
（2）「比較社会論」とは何か・・・S字曲線論＝五局面・五社会説
（3）『アバター』の比較社会論的考察
（4）おわりに

（1）はじめに

日本は世界でもダントツの親米国家である。イラク戦争後の二〇〇六年の時点でも、英五六％、仏三九％、独三七％、トルコ一二％に対して、六三％の日本人が米国が「好き」と答えている[註1]。

さらに、「中国が超大国として米国を抜くか」という問いかけを世界各国で二〇〇九年と二〇一一年の二度実施したところ、英・仏・独などは二〇〇九年の時点で「追い抜く」が多数を占めており、二〇一一年になると米国・イスラエルでも「追い抜く」が多数派になっているのに対し、日本だけは「追い抜けない」が二〇〇九年で五九％、二〇一一年で六〇％で一貫して多数派を占めている（図表1）[註2]。

二〇一〇年は、一九一三年以来世界一の工業生産国であった米国を中国が抜いた歴史的な年であり、かつ、日本が一九六八年以来維持してきたＧＤＰで世界第二位の地位を中国に譲った年でもあったのだが、日本では尖閣諸島での中国漁船衝突事件が大きな話題になり、中国が日本は言うに及ばず米国をも凌駕する潜勢力をもった大国として登場してきたことを覆い隠してしまったかのようであった。

多くの日本人は米国が覇権国であり続け、米国に追随していけば、日本の繁栄と安全が確保されると思い込んでいるように見える。先の世論調査で驚くべきは、日本だけが二〇〇九年と二〇一一年で「中国が米国を抜くはずがない」と思いこんでいる人の割合がほとんど変化していないということだ（尖閣諸島をめぐる領土問題は、米国崇拝とアジア蔑視の表裏一体である「脱亜入欧（米）」的姿勢の固定化のために利用されているというべきである）。

しかし最大の親米国家である日本に住んでいる我々は米国のことをどれだけ知っているのであろうか（全く同様の問いを中国について発することもできる）。本論は、二〇〇九年発表のジェームズ・キャメロン監督の『アバター』を後述する「比較社会論」的に考察しつつ、「米国とはいかなる国か」という問題への導入を意図している。

（本稿は、神戸市外国語大学二〇一五年度後期オープン・セミナーで行った『米国はいかなる国か—米国史を学び直す』の講義ノートの一部、および私が毎年同大学で行っている『比較社会論』の講義ノートの一部を再構成したものである。）

註１　吉見俊哉『親米と反米』・岩波新書・二〇〇七・p. 10

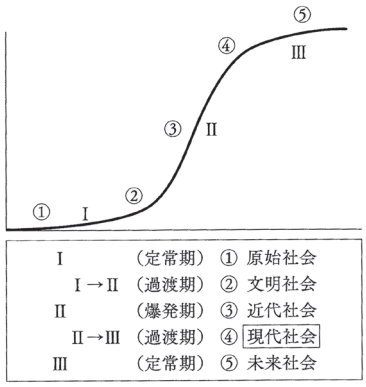
註２　孫崎享『不愉快な現実』・講談社現代新書・二〇一二・p. 20

図表１「中国が米国を抜くと思うか
『孫崎享『不愉快な現実』(p. 20)

	2011年(%)		2009年(%)	
国名	追い抜く	追い抜けない	追い抜く	追い抜けない
仏	72	28	55	43
英	65	26	49	41
中国	63	17	67	20
独	61	34	51	41
ロシア	45	30	41	36
イスラエル	47	44	34	56
米国	46	45	33	57
日本	37	60	35	59

中国は超大国として米国を抜くか
('13 of 25-China Will be World's Top Superpower' 'China Seen Overtaking U.S as Global Superpower', Pew Research より筆者が作成)

図表２「人間の歴史の五つの局面」
『定本　見田宗介著作集Ⅶ』(p. 12)



人間の歴史の５つの局面

（２）比較社会論とは何か・・・S字曲線論＝五局面・五社会説

たとえばある島に偶然流れ着いた動物の新種は、しばらくは増えもせず減りもしない横ばいの状態を続けた後、天敵がおらず食物が十分に存在すればやがて爆発的に個体数が増加してゆくが、島の有限な環境において無限の増加は不可能であり、理想的には定常状態に到達して安定する。（図表２）この生物学が**ロジスティックス曲線**と呼ぶ個体数（人口）の変化が描く**S字曲線**の、人口爆発以前期・人口爆発期・人口爆発以後期の三局面に、前近代社会・近代社会・現代社会という三社会類型を対応させるアイデアは、リースマンの『孤独な群衆』（一九五〇）で最初に提案されたものである。

しかし人口の増加率が一九七〇年ごろに世界同時的に減少に転じたことを発見し、なおかつ三局面にそれぞれ

原始社会から近代社会への過渡期としての文明社会、および近代社会から未来社会への過渡期としての現代社会を設定して、五局面・五社会説として洗練させたのは見田宗介である（図表２）[註1]。これはきわめて重要な学説で、現代人にとって必須の知識と見なされるべきである。

Ⅰ爆発以前期・〈原始社会〉と〈文明社会〉

一〇〇万年前・アフリカ大陸に住んでいた人類の祖先の人口は十二万五千人ほどであったが、一万年前・旧石器時代の終わり頃には五百万人に増えていた言われる。〈動物社会〉から人類が分離し〈原始社会〉を形成した要因は、対自然的関係を変えた道具と、対人間的関係を変えた言語の発明であったと考えられる。狩猟と採集を基本とする〈原始社会〉は人類が形成したもっとも原的な社会であり、その後の社会の根底に存続していると考えることができる（我々の内には原始人が生きている）。

〈原始社会〉から〈文明社会〉への転換を促したのは、対自然的関係を変える農耕・牧畜の発明と、対人間関係の変容をもたらす文字の発明であった。交易と都市・国家と貨幣経済などの近代社会に中心的役割を果たす現象はすでに〈文明社会〉に胚胎し、見田宗介が言うように、近代を準備する過渡期と考えることができる。人口は緩やかな上昇傾向を示すが、一五〇〇年頃の世界人口は五億と推定されている。

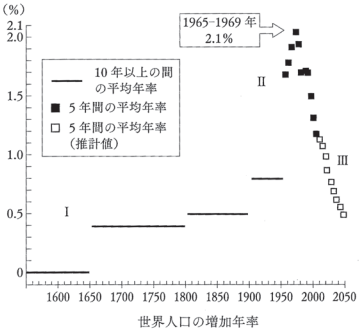
Ⅱ大爆発期・〈近代社会〉

〈近代社会〉は人口の「大爆発期」の局面に対応する。一六五〇年六億、一七五〇年七億と加速度的に人口が増加し、一九〇〇年に一六億、二〇〇〇年には六十億に達し、二〇一六年の現在は七二億を超えている。〈近代社会〉は、《①自然征服の技術と精神（科学技術）、②貨幣を析出するする交換経済（資本主義）、③都市という密集する社会の形態（都市）、が工業生産力として結集することを基軸として全域化し、原理化してゆく社会の局面》[註2]と、見田宗介にならって定義しておこう。〈近代社会〉を形成した要因として、人間と対自然的関係の変容をもたらした産業革命と、対人間的関係を変容させた印刷術の革命（空間的・時間的コミュニケーションの拡大）が重要である。

Ⅲ爆発以後期・〈現代社会〉と〈未来社会〉

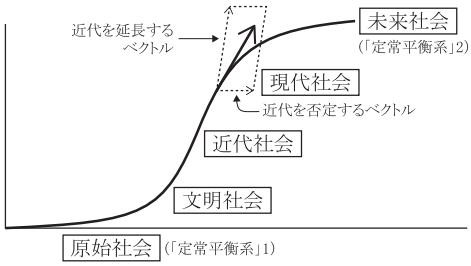
人口は現在も増加しているが、一九七〇年を境にして人口の増加率は先進国のみならず韓国・メキシコ・タイなども世界同時的に減少に転じていることを見田宗介は確認している（図表３）[註3]。したがって、一九七〇年以後が〈現代社会〉に対応し、対自然的関係の変容は消費化（生産至上主義からの転回）によって、対人間関係的変容は情報化（双方向コミュニケーションへの転回）によって牽引されたと見田宗介は考えている[註4]。

図表３「世界人口の増加年率」
『定本　見田宗介著作集Ⅶ』（p. 14）



（U. S. Census Bureau, *International Data Base*（Data updated 4-26-2005）より作成）

図表４「現代社会を構成する二つのベクトル」



エネルギーの消費量の曲線を見ても、近代、とりわけ後期近代の加速度的な成長は持続不可能な一回的な「爆発」であることは明らかである。人類の破滅を回避するためには「変曲点」を経過し、最終的には「定常平衡系」としての安定した持続（〈未来社会〉）に至る必要がある。（図表２）

見田宗介の五局面・五社会説の重要性は、さらに速く、さらに遠く、さらに多く、という近代を過激に延長するベクトルは破滅への道であることを可視化していることである（この認識の共有は人類が未来社会に到達するために不可欠である。近代社会の価値観や生き方を前提にして物を考える傾向があまりにも強いからだ）。現代社会においては、近代を延長したベクトルと、近代を否定して未来の「定常平衡系」に向かうベクトルが混在し、せめぎ合っている。近代を延長するベクトルを、象徴的に、ファースト・フード的ベクトル、近代に対抗するベクトルをスロー・フード的ベクトルと呼んでおく（図表４）。

比較社会論とは、以上のように〈原始社会〉・〈文明社会〉・〈近代社会〉・〈現代社会〉・〈未来社会〉の社会類型を設定して、全てのものをこれらの社会類型との関係で考察する立場である。比較社会学（見田宗介＝真木悠介）以外にも、比較経済学（カール・ポランニー）・比較宗教学（エリアーデ）、さらに比較政治学・比較美学あるいは比較芸術学、比較法学、比較思想なども考えることができる。これらを総称して**比較社会論**と呼ぶ。

比較社会論は、ゴーギャンの晩年の大作の題名である「我々はどこから来たか？我々は何ものか？我々はどこへ行くのか？」という問いに答えるための最も包括的な学問的枠組みであると言える。現在は混迷の時代でとりわけ「我々はどこに行くのか？」という問いには容易に答えることはできないが、比較社会論はある程度未来社会の輪郭を描くことを可能にしてくれる学問である。以上駆け足で本論の立場を説明した。

註１　Ｓ字曲線の五局面と五つの人間社会（原始社会／文明社会／近代社会／現代社会／未来社会）を対応させる見田の学説については以下の論文に依拠している。見田宗介『社会学入門―人間と社会の未来』（岩波新書・二〇〇六）第六章「人間と社会の未来―名づけられない革命」および『定本見田宗介著作集Ⅶ・未来展望の社会学』所収「人間と社会の未来」（岩波書店・二〇一二）。図表２は著作集 p. 14からの転載。

註２　見田宗介・同・p. 3

註３　見田宗介・同・p. 12

註4　見田宗介・同・pp. 18-21 および見田宗介『現代社会の理論』（岩波新書・一九九六）

（3）『アバター』比較社会論的考察

①あらすじ

舞台は西暦二一五四年のアルファ・ケンタウリ系惑星ポリフェマス最大の衛星パンドラである。パンドラは地球のジャングルを思わせる密林に深く覆われた星であり、そこには獰猛で奇怪な野生動物たちと、ナヴィという三メートルの身長と青い肌をもった人間型の生物が様々な部族に分かれて暮らしていた。ナヴィが住む森の奥には稀少鉱物アンオブタニウムの鉱床があり、それを狙うスカイピープル（地球人、より正確には米国人）は、ナヴィと人間のＤＮＡを組み合わせて作ったアバター（そのＤＮＡをもった人間が操縦することができる）を送り込み、ナヴィを懐柔しその土地から立ち退かせようと画策している。死んだ双子の兄とおなじＤＮＡを持つ元海兵隊員ジェイク（足を負傷して車椅子生活を送っている）が、兄のＤＮＡで作られたアバターを代わりに操縦するためにパンドラにやってくるところから物語は始まる。

画面から映像が目の前までせり出してくるかのような三次元の映像効果の迫力は予想以上であった。未だかつてこのようなめざましい映像を人類は見たことがなかったにちがいない。見ること・見えることの不思議さと快楽を堪能させてくれる映画であり、一つ一つの場面をゆっくり見る余裕がないのが残念であるほど一場面の情報量が多く新鮮であった。この点だけでも画期的な映画であることに間違いはないと思う。

日本人としては宮崎アニメの影響（とりわけ『風の谷のナウシカ』・『天空の城ラピュタ』・『もののけ姫』など）をところどころに感じることができる点も興味深い。

しかし本論では、映像美の問題には深入りしないで、比較社会論的考察に集中しなければならない。

②比較社会論的立場から考察すると

ストーリーには、**マイノリティの問題**（ナヴィは、特定の、例えばナバホ・インディアンをモデルにしているというわけではないが、アメリカ・インディアンを暗示していることは疑えない）、**エコロジーの問題**（ナヴィの生活は自然と共生する原始共同体レベルのものである）が組み込まれていて、現代社会にに生きる我々に圧倒的な問いかける力を持っている。この作品が興行成績の世界一を保持しているのはその証左と言ってよい（ちなみに第二位もキャメロンの『タイタニック』である）。

アメリカ批判、近代文明批判としても見ることができるだろう。この映画は反米的・反軍的・反キリスト教的であるとして保守派から批判されている。基本的に恋愛映画である『タイタニック』はアカデミー賞を十一部門で受賞したのに対し、『アバター』がアカデミー賞にノミネートされながら、主要な賞である監督賞や作品賞を取れなかったのはそのせいだろう。（二〇一〇年度アカデミー賞監督賞・作品賞を受賞したのは、皮肉なことに、彼の元妻キャサリン・ビグロー監督作品の『ハート・ロッカー』である。これはイラク戦争後のイラクで地雷を解除する兵士を主人公にした映画であるが、この映画には米国や米軍に対する批判の要素はまったくない。）

比較社会論の視点から見て重要なのは、**現代社会と原始社会の二つの社会の争い（軍事的争いだけでなく、より大事なのは二つの価値観の争いである）**が描かれていることだ。地球人（スカイ・ピープル）と惑星パンドラの先住民（ナヴィ）の戦いは、ベトナム戦争やイラク戦争などを想起させることはたしかだが、基本となっているのは、**現代社会（その最先端であるアメリカ合州国）と原始社会（ネイティブ・アメリカン）の争い**と見るべきであろう。

③近（・現）代社会と原始社会の争い

（i）近（現）代社会の価値観あるいは生き方

α　株主資本主義

「資源開発公社（ＲＤＡ Resources Development Administration）」は、稀少鉱物である超伝導物質・アンオ

ブタニウムを採掘するためにパンドラに進出（侵略）し、その鉱脈が眠る土地から先住民を立ち退かせようとアバターを送り込んでいる。《ＲＤＡの起源は、アメリカン・ドリーム的な設定で、二一世紀初頭にシリコン・バレーで二人の若者が自宅のガレージで始めたごく小さな会社が、ほんの数十年でほとんど政府のような役割すら担うような世界最大の企業へと大成長を遂げた》という設定である[註1]。アップル社を彷彿とさせるような出発点をもっているが、ＲＤＡは地球外の惑星にまで進出して植民地政府として振る舞う宇宙的大企業である。

このように鉱物資源を求めて米国が先住民の居住地に侵略することは米国が幾度となく繰り返してきたことである。二つだけ例を挙げよう。一つは、リトル・ビッグ・ホーンの戦いである。スー族の聖なる山「パ・サパ（ブラック・ヒルズ）」は「ララミー砦条約」（一八六八年）でスー族の土地として米国は認めていた。ところが、カスターの騎兵隊がそこに金鉱を発見し、条約を破り侵略してきたのである。クレイジー・ホース率いる三千人のスー族とシャイアン族の連合軍が、カスター将軍率いる第七騎兵隊を壊滅させた（戦死者二八五名）。これが、アメリカ・インディアンが勝利した稀なケースとして有名なリトル・ビッグホーンの戦い（一八七六年）である。現在ブラック・ヒルズは「鉱物資源の宝庫」であるとともに「核廃棄物の投棄地」になっているという。

もう一つはナヴァホ・インディアンの居留地にウランが発見され、多くの会社や企業が進出してきた例である。藤永茂氏のブログ『私の「闇の奥」』から関連する箇所を引いてみよう。

《ニューメキシコ州の広大なナヴァホ・インディアン保留地やその近辺の地層にウランがあることは以前から知られていましたが、アメリカが原爆製造に乗り出した一九四〇年代以降、特に、一九五〇年に有望なウラン鉱脈が発見されてからは、幾つもの会社が乗り込んできてウランの採掘、選鉱が盛んに行なわれ、それに多数のナヴァホの人々が雇用されましたが、それらの労働者たちは高い比率で肺がんを発症し、放射線被曝の病状を示すナヴァホ・インディアンの数は数千人に及ぶようになりました。

一九七九年三月二八日、米国ペンシルベニア州の**スリーマイル・アイランド原子力発電所の原子炉の炉心が溶融する事故**が起りました。米国史上最大の原発事故として広く知られています。同年七月一六日、ニューメキシコ

州のチャーチ・ロックのウラン鉱石処理場から出る選鉱かすと廃水を貯めてあった貯水池のダムが決壊して、千トン以上の選鉱かすと九千三百万ガロンの汚染廃水が近くのプエルコ川に流れ込みました。この事故で放出された有害放射線の総量はスリーマイル・アイランド原発事故のそれに匹敵する大きさであったのに、それによる土壌や水の汚染が十分に意識されなかったため、その地域のナヴァホ・インディアンたちとその家畜たちは大きな被害を受けたのですが、この**チャーチ・ロック事故**は、**スリーマイル・アイランド事故**にくらべて、ナヴァホ・インディアン以外の人々の記憶には殆ど残っていません。ニューメキシコやアリゾナのナヴァホ・インディアン保留地での長期間にわたる放射線による被害のため、ナヴァホ族は二〇〇五年にウラン採鉱禁止を宣言し、被害者に対する補償を要求しています。

現時点では、ナヴァホ・インディアン保留地からウラン鉱山会社は撤退した状況ですが、ここに来て、オバマ政権は米国のエネルギー政策を見直す意図を明らかにし、その重要な一環として、またまた原子力発電に力を入れようとしています。その動きに応じて、ナヴァホの保留地内で、再びウランの採掘を行なう計画をエネルギー関連の会社が進めているようです。≫[註2]

「資源開発公社」の責任者セルフリッジは、軍人クオリッチやジェイクや女性科学者グレイスを前に次のように発言する（ＤＶＤ第一三章）。**「奴らを殺してみろ。株主たちが非難される。その非難よりも株主たちが一番恐れるのは赤字決算。そのためには武力行使もためらわない。」**

発言の前半は**株主価値説**と呼ばれる**「企業にとって一番重要なのは株主の利益である」**という思想である。「企業＝社会公器」説＝「ステークホルダー（労働者・地域住民・社会など企業の利益関係者）」論という企業観も存在したが、一九九〇年代に株主価値説がアングロサクソン（英国・米国）では完全に主流になり、日本でもその線に沿って会社法が変更された[註3]。**現在もっとも巨大な権力を持っているのは多国籍企業である**（例えばＴＰＰの本質は多国籍企業が国家以上の権力を持つことを協定という形で合法化することである）。

β　戦争国家

ところで、セルフリッジの発言の後半部分、「株主たちが一番恐れるのは赤字決算。そのためには武力行使もためらわない。」は、米国の資本主義と手を携えている軍国主義への言及である。アメリカは、その歴史のうち九三％ ―一七七六年の独立以来の二三九年のうち、二二二年間は戦争を行っている（WashingtonsBlog　二〇一五年二月二三日）[註4]。もっとも過激な近（現）代社会を体現する米国は、戦争（最悪の環境破壊ecosideと大量虐殺　genocide）に次ぐ戦争をくり返してきた国家である。「資源開発公社ＲＤＡ」はクオリッチを指揮官とする軍隊と一体である。

一八六四年サンド・クリーク虐殺事件を経て一八九〇年ウンディド・ニー虐殺事件が、ピクォート戦争（一六三七年）[註5]以来継続してきたインディアン戦争の終結と西部開拓の終焉（国内フロンティアの消滅）を意味した。そこから米国の海外への侵略が開始され、大陸帝国主義国家から海洋帝国主義国家へと変身していく。

外国との最初の戦争である米西戦争（一八九八年）の結果、米国は最初の海外植民地フィリッピンを獲得する。わき起こった独立運動を米国軍は容赦なく弾圧する（米比戦争一九〇〇年頃）。マッカーサー【フィリピン方面最高司令官で、日本を占領したマッカーサーの父親】とジェイコブ・スミス将軍は虐殺命令「十歳以上は皆殺しEvery one over Ten」を出す。当時フィラデルフィアの新聞の第一面にでた現地報告の一部。≪アメリカ軍は犬畜生とあまり変わらぬと考えられるフィリピン人の一〇才以上の男、女、子供、囚人、捕虜、・・・をすべて殺している。手をあげて投降してきたゲリラたちも、一時間後には橋の上に立たされて銃殺され、下の水に落ちて流れて行く・・・。これは文明化された戦争ではない。我々は文明人を相手にしているのではない。彼等にわかる唯一の言葉は力であり、暴虐で残忍な行為である。したがって我々はその言葉を使うのだ。≫米軍の指揮官にはインディアン・ファイターが参加して、フィリピン人とコマンチ・スー・アパッチなどのインディアンと比較した。≪一人のインディアンを捕まえるのに一〇〇人の兵士を要したものだったが、フィリピン人はもっとたちが悪い。≫[註6]

米国の建設は西部開拓の歴史であり、先住民であるアメリカ・インディアンの虐殺と表裏一体である。そして海外への進出（侵略）は、インディアン戦争の延長である。太平洋戦争、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争を経て、自作自演（と断定してもよいほど様々な傍証がある）の九・一一同時多発テロによって二一世紀にも戦争の世紀（二十世紀）を延長しようとした米国は、アフガニスタンでもイラク戦争でもインディアン戦争を継続していると見ることができる。

二〇〇一年の同時多発テロの首謀者として米国が追い続けてきたビンラディンは、二〇一一年五月一日パキスタンの首都イスラマバードの近郊で米国海軍の特殊部隊によって殺害された。ウサマ・ビン・ラディンの暗号名はジェロニモであった。

アメリカ南西部のアパッチ族と米国との戦争をアパッチ戦争（一八五一～一八八六年）というが、アパッチの居住する土地に金鉱が見つかったことがその原因であった。ジェロニモは米軍に最も頑強に抵抗した伝説的指導者であり、彼が降伏した一八八六年に戦争は終結した。オサマ・ビン・ラディンのジェロニモへの同一視は米国の戦争がいまだにインディアン戦争の延長であることの一つの証左である。

註１　https://ja.wikipedia.org　ウイキペディア「アバター」の項目。

註２　藤永茂氏のブログ『私の「闇の奥」』http://huzi.blog.ocn.ne.jp/2010／06／16より）

註３　ロナルド・ドーア『金融が乗っ取る世界経済―二十一世紀の憂鬱』（中公新書・2011）英米モデル（新自由主義）の勝利として、消費者主権思想に基づく規制撤廃／効率の観点からも、道徳的な観点からも望ましい、競争原理の貫徹／株主価値の最大化を基調とするコーポレーション・ガバナンスの導入／株式市場を経済の主軸とし、自己責任の徹底による、肥大した市場主義／福祉国家のスリム化などが挙げられている。

註４　http://www.washingtonsblog.com/2015/02/america-war-93-time-222-239-years-since-1776.

註５　ピクォート族は、他部族のアメリカ・インディアンに共闘を呼びかけたが、白人植民者側は共闘を挫折させ、孤立したピクォート族をミスティク川のほとりの砦に追い詰め、一斉射撃をして大量虐殺（五〇〇ないし六〇〇人）を行った（インディアンの白人

側同盟軍も参加していた）。≪ピューリタンの植民者にとって、新世界は約束の土地に他ならず、キリスト教に改宗しない異教徒は神の敵で、異教徒たるインディアンのジェノサイドは、神への供物であり、讃歌でもあるというわけだ。≫土井淑平『終わりなき戦争国家アメリカ』（星雲社・二〇一五・p. 29）土井氏が示唆するように、アメリカ・インディアンの虐殺とキリスト教の関係を問題にしないわけにはいかないだろう。後者は前者を控えめに言っても助長したと考えられる。もう一つキリスト教の関与を補強する引用をしておこう、これも土井氏の著書から。≪マッキンレー大統領はフィリピンが「神からの贈り物としてわれわれにもたらされた」と宣言した。当時、アメリカの有名な帝国主義者のアルバート・ベヴァリッジ上院議員も、「フィリピンは永遠に我々のものであり、・・・フィリピンのすぐ先には中国の無限の市場がある。・・・太平洋はわれわれのものだ」とのたまわった。ベヴァリッジは「マニフェスト・デスティニ」【「明白な運命」の意で、アメリカ・インディアンを虐殺してフロンティアを押し進めることが米国に与えられた明白な運命であると考える独善的な自己正当化の信念を言う。「アメリカは世界にとって例外的で不可欠な国家」であるとするアメリカ例外論の先駆けである。】を唱えたオサリヴァン同様、キリスト教と文明をもたらすことがアメリカの務めだと信じていた・・・。≫（土井淑平・前掲書・p. 121・【】内は田中による補足説明）

註6　藤永茂『アメリカ・インディアン悲史』（朝日撰書・一九七四・p. 246）

（ii）原始社会の価値観あるいは生き方

α　森とのつながり（共同体の自然への内在）

ジェイクは、ナヴィを説得する前段階としてアバターを操縦して（アバターに乗り移って）、ネイティリという酋長の娘に導かれつつ、ナヴィの生活と価値を学んでいく。まずナヴィと森のつながり。

エナジーは世界を取り巻き、命あるものの体内を流れているが、そのエナジーは借り物でいつかは返さねばならない（葬式の場面）。『アバター』が自然そのものを神とみなす「汎神論的」映画として米国の保守派から批判されたのは当然である。森の圧倒的な存在感が３Ｄ映像で描かれており、原始社会の信仰である「虫木草魚教」（水木しげる）としてのアニミズム的世界をリアルに実感させるほどだからである。

ナヴィ（オマティカヤ族）が住んでいたホーム・ツリーや、「魂の木」や先祖の声が聞こえる「声の木（ウト

ライヤ・モクリー）」、そして様々な動植物が生息する森。これらは原始社会の自然観や信仰を示している。大事なことは、我々と無縁な事柄が描かれているのではないということである。我々現代人のなかには近代人も生き続けているだけでなく、文明人も、原始人も生き続けているという認識は、既述したように重要である。

森や木に神を感ずるナヴィの自然観は、実は我々日本人・朝鮮人・沖縄人にも非常に親しいものだ。岡谷公二『原始の神社を求めて　日本・琉球・済州島』（平凡社新書・二〇〇九）によると、沖縄（琉球）のウタキ（御嶽）とよく似たものは韓国、とりわけ済州島にもあり、これらが日本の神社の原型ではないかと岡谷氏は考えている。神社の社などの建物は仏教の影響で後からつくられたもので、神社の原型である沖縄のウタキや済州島のタン（堂）には建物はなく、神の依り代である神樹（聖なる木）を中心とした森、日本の神社の場合は「**鎮守の森**」、沖縄の「**ウタキの森**」、済州島の「**堂の森**」が、神が降臨する聖なる空間である。これらの聖なる空間はもともと遺体を風葬するお墓だったのではないかと岡谷氏は示唆している。

《その暗い森の中へ入って行く時、私は、戦慄やときめきに似た心の震えを感じる。迫ってくる木々の生気、音のしない葉むらのそよぎ、森の奥へと吹き通ってゆく風、木漏れ日の矢、鳥の声・・・・・私はすべてに神を感じる。森そのものが神なのだ。》(p. 243)

我々現代人のなかにも原始人は眠っていて何かをきっかけにその原始人がめざめることがある。現代人の底の底の方に、近代人や文明人の層よりももっと深いところに、原始人の層があり、『アバター』の映像に触れたり、この岡谷氏の文章を読んだりすると、まるで深い井戸に落ちたかのようにその層へと届いて、原始社会の人々の感覚と信仰を（人によって程度の差はあるだろうが）実感しうるということだと思われる。

狩りの場面でジェイクがネイティリに教えられて口にする言葉（「兄弟よ、君に感謝する。魂はエイワの元へ、肉体は留まって、ナヴィの一部となれ」）は、日本の先住民アイヌの考え方によく似ている。アイヌ民族は

熊は肉体を人間のために「みやげ」として与え、魂は天に帰ると考えた。

ハンターとして最後の試練は、イクランと呼ばれる恐竜型の鳥類を飼い馴らすことだ。ここでは「飼い馴らす」という人間と動物の暴力的でもあれば官能的でもある関係が見事に描かれている。ジェイクは特定のイクランと格闘の末に「絆（ツァヘイル）」を結びナヴィの一員として認められる。

β　人間同士のつながり（人間の共同体への内在）

こうしてジェイクはナヴィ（オマティカヤ族）の一員になっていく。そしてネイティリという宮崎駿のもののけ姫やナウシカのようなナヴィの女性と結ばれる。

もう一つの非常に印象的な原始社会の特徴は、ナヴィ同士のつながりである。ナヴィ同士が手をつなぎ合ってネットワークを形成する映像がだいたい三回ぐらい現れる。ジェイクがメンバーとして受け入れられる場面（一九章）。グレースを治療する場面（二七章）。そしてジェイクがアバターに完全に変身する、つまりアバターでなくなる最後の場面。これらの場面は、ナヴィ同士がつながり合って共同体を形成すること（β）、さらにこの共同体が「エイワ」と呼ばれる「自然＝神＝エネルギー」とつながる（内在する）ことを映像化している。原始社会の特徴は、（α）人間共同体の自然への内在と（β）人間の共同体への内在、二重の内在である。

註1　ナヴィの居住する「ホーム・ツリー」は、エリアーデの言う「聖なる空間」であり、「地の臍」にして「世界の中心」あるいは「世界の軸」である。

≪（a）聖なる空間は空間の均質性における裂け目。

（b）この裂け目は一つの宇宙領域から他の宇宙領域への移行（天から地上へ、または地上から下界へ）を可能にする〈入口〉によって象徴される。

（c）天との交流は、柱（宇宙の柱）、梯子、山、樹、蔓等の形象によって表現される。それらはみな世界の軸axis mundiに関係する。

（d）この世界軸の周囲に〈世界〉（＝われらの世界）が広がる。したがってこの軸は〈中央に〉、すなわち〈地の臍〉にあり、それは世界の中心である。》エリアーデ『聖と俗』（風間敏夫訳・法政大学出版会・一九六九・p. 30）

逆に、「近代社会の空間」は、「中心をもたない世俗空間」であり、無限に広がる均質な幾何学空間（「デカルト空間」）である。だからこそ「開発可能」な空間である。「資源開発公社」の軍隊がナヴィを襲撃した時、攻撃目標は「ホーム・ツリー」の破壊であった。稀少鉱物を採掘するためには、「聖なる空間」を「開発可能な空間」に変質させなくてはならないからである。

（iii）価値の争い・・・近（現）代社会と原始社会の価値的な対立

近代社会・現代社会の直面する最大の問題の一つが環境破壊（エコサイド）の問題である。少なくとも自然環境については、原始社会の人間たちの方が優れた生き方をしていた。シガニー・ウィーバー扮するグレースと呼ばれる科学者は、ナヴィは自然のネットワークを感知する能力を持っている、と述べ、ナヴィ（原始社会）が自然と共生していることを科学的に説明しようとしている。他方、もっとも過激な近（現）代社会であるアメリカは、戦争、すなわち人間の大量虐殺（ジェノサイド）と最悪の環境破壊（エコサイド）をくり返してきた国家である。

戦いの前にジェイクが「魂の木」（エイワのなかで生きている先祖の声が聞こえる「声の木」）と交信する場面で次のように述べる。「**地球には緑がない。自然を殺したから。人間はここでも同じことをしようとしている。止めるために戦う。**」それに対してネイティリは「母なるエイワは誰の味方もしない。自然の調和を守るだけ」と述べるが、ＲＤＡの軍隊によってナヴィが絶体絶命の窮地に追い詰められた時、パンドラの野生動物たちが現れてナヴィを救うのを見て、ネイティリは「エイワが応えてくれた」と叫んだのであった（そのシーンは宮崎駿の『風の谷のナウシカ』を思い起こさせるものであった、自然の怒りの発現としてのオーム）。

（iv）戦いの行方・・・インディアンの予言「**やがてインディアンが必ず勝つ**」

映画のラストシーンは、敗北した地球人たちが地球に送り返されるシーンである。もちろん実際のアメリカ・インディアンが武力で白人に勝ったことはリトル・ビッグホーンの戦いなど希な例外にしか過ぎない。アメリカ・インディアンは負け続け虐殺され続けてきたし、人類史上最強の軍隊である米軍に武力で勝利する可能性が示唆されているわけではあるまい（最後に勝利したのは、パンドラの野生動物であり、パンドラの自然であった）。しかし、二十一世紀の地球において、インディアンの予言は現実性をましつつあるのではないか？**『アバター』の結末は、武力ではなく、インディアンの生き方や価値体系が、アメリカ的生き方、アメリカ的価値体系よりも、より重要になってきたことを象徴的に示すものではないか？**

≪北米インディアンの悲史には、アメリカに象徴される近代文明に対する重要な抗議申し立てが、くっきりと書き込まれている・・・。一九七六年はアメリカ建国二〇〇年の記念の年にあたる。その時、アメリカは、そして世界は「アメリカは可能か」という根本的な問いに直面するであろう。**「アメリカ」の可能性に対して、最初から断固たる拒否を試みたのが北米インディアンであった。彼等は屈従よりも死を選んだ。彼等の幸福論は死を以て守るに値した。**「アメリカ」によるゼノサイドを辛くも耐え抜いた、生き残りの不敵なインディアンたちはうそぶく。「悠久たる歴史の前には、二〇〇年など取るに足らぬ。**やがてインディアンが必ず勝つ。**」このたわごとを笑ってすまされぬ日がもうそこまでやって来ている。**エコサイド**(ecocide)という新語がある。インディアンの皆殺しが始まったとき、すでに我々はエコサイドを開始していたのである。≫（藤永茂『アメリカインディアン悲史』p.247）

藤永氏のこの本を比類のない名著にしているのは、一九七四年の段階で、**人類が生き延びるためには、近代という狂気の時代、エコサイドとジェノサイドの時代を越えて、近代が抹殺してきたアメリカ・インディアンの価値観や生き方を学ばなければならない**ということを見抜いていたことである。**未来社会のヒントは、彼らが死を以て守ろうとした「アメリカ・インディアンの生き方American Indian Way of life」にあること**を、宣言していたこと

である。

（v）「彼等の幸福論」＝**アメリカ・インディアン的生き方・価値体系**と「**白いインディアン**」

シガニー・ウィーバー扮するグレースと呼ばれる科学者は、ナヴィは自然のネットワークを感知する能力を持っていると考え、アンオブタニウムというレアメタルを手に入れるために、その自然のネットワークを破壊しようとする地球人に反対して、ジェイクと共にナヴィの側にたって戦う。そのほかにも何人かナヴィの側にたつ地球人が出てくる。これは「白いインディアン」と呼ばれる現象【白人の原住民化の現象】を思い起こさせる。アメリカで白人がインディアンと接触をはじめて以来何千人、何万人という白人がインディアンに自らなっていったという現象である。

トルーク・マクトを乗りこなした者はナヴィを統一するという伝説が語られた後、アヴァターの操縦から目覚めたジェイクが、「世界が逆転したようだ。向こうが現実でこちらが夢のようだ。俺は一体何ものなんだ。」と述べる場面がある。go nativeを生々しく描いた場面だ。こういう場面が『アヴァター』を奥の深い作品にしている。

《白いインディアンの大多数は彼等の選択について何の説明も残さなかった。もとの言葉を忘れ、過去を忘れ、彼等はただ彼等がこれと選んだ社会のなかに消えていった。しかし、インディアンに捕らえられ、帰って来てからその経験談を記した人たちが捕虜になったまま留まることを選んだ者たちの動機について、幾らかの手がかりを残してくれた。彼等がそのまま留まったのは、インディアンの生活が、**社会連帯の強いセンス**、**豊富な愛情**、**並々ならぬ清廉高潔さ**を持っていることを見いだしたからである。これらの諸徳は植民地ヨーロッパ人の間でも重んじられてはいたものの、インディアンには及ばなかった。しかし、インディアンの生活はこれ以外の、**社会的な平等**、**可動性**、**冒険**といった価値についても魅力的だった。そして、二人の成人白人インディアンが認

めたように、「**最も完全な自由、生活のしやすさ、それに、我々がしばしば支配されてしまうあれこれの心配事や心をむしばむ孤独感が全くない**」のだ。≫[註1]

さらにAmerican way of life とAmerican indian way of lifeの比較のために、藤永茂氏の名著から引用を続けよう。最初の引用は、「飲む、盗む、喧嘩する、殺す、の白人文明はうんざりだ。子供たちをあんな大人に育てたくない」と述べて、一九六八年の夏にカナダのエドモントンの近くにあるインディアン保留地から百数十人の人々を連れてクーテネーの山に入ってしまった老酋長が語った言葉。

≪白人たちよ、あなたがたの生活様式についての、おろかしいほどの自信はいったいどこからやってくるのか。あなたがたが、われわれインディアンの生活と、歌と、よろこびを無残にもふみにじってしまったとき、ほんとうは、あなたがたの中にもあったはずの貴重なものを殺してしまったのではなかったか。あなたがたがやって来てから、空は日ましにすき通らなくなり、草原に兎は遊ばず、湖に魚は絶えた。≫[註2]

≪白人たちが物の所有によって幸福を求めるとき、彼等は分かち合うことをよろこびとし、白人たちが隣人と競い、それに優越することによって幸福を求めるとき、彼等は自己にうちかつことによって自らと他の自由を確保し、白人たちが大地を陵辱してその富を強奪するとき、彼等はそれを大いなる母と慕った。≫[註3]

この一文に二つの幸福論の対立が要約されている。物の所有をめぐって白人とアメリカ・インディアンの価値観の相違があらわになったエピソードを引いておきたい。「土地の売却を求める米大統領へのシアトル酋長の返書」の一節である。≪ワシントンにおられる大統領が、我々の土地を買いたい、と手紙をよこされた。しかし空や土地をどうやって売ったり買ったりできるのですか？それは我々には奇妙な考えです。我々が新鮮な空気や泡立つ水を所有していないならば、どうやってあなた方はそれらを買うのでしょうか？この大地のすべての部分が

我々にとって聖なるものなのです。≫[註4]

アメリカ・インディアンには土地の私有という観念がそもそも存在しなかったのに対し、アメリカンドリームの筆頭に挙げるべきは、新大陸では土地が所有できるということであった。そしてまた、大地を母と慕うかわりに、金であれウランであれ大地を掘り返して破壊し汚染してきたのが近・現代社会であった。また他者と競い他者に優越することに幸福を見出す近代社会の競争の原理と、自己に打ち克つことに幸福を見出す原始社会の克服の原理は、人間の生き方としてどちらがすぐれているのか[註5]。

≪人間が、人間の集団が、しあわせであるためには、実はほんのわずかな物しか要らぬのだと彼等は私たちに告げているように思われる。人間がしあわせであるためには、限りない貪欲さで、自然を、また人間を搾取しなければならぬと考えるのは大間違いだと、彼等は私たちに告げているように思われる。**インディアン問題はインディアンたちの問題ではない。我々の問題である。そして「インディアン」はいたる所にいる。**素朴な親愛と畏敬をこめてクマを殺すことを知っていたアイヌたちだけが我々にとってのインディアンではない。≫[註6]

註1　藤永茂『アメリカン・ドリームという悪夢―建国神話の偽善と二つの原罪』第三章アメリカ史の学び直し・「白い奴隷・白いインディアン、黒い奴隷」参照。（三交社・二〇一〇・p.105）

註2　藤永茂『アメリカ・インディアン悲史』（朝日選書・一九七四・p.244）

註3　同・p.249

註4　Joseph Campbell: The Power of Myth(Macmillan Language House, p.10

註5　「二つの幸福論」に加えて「二つの欲望の体系」も考慮に入れておく必要がある。≪環境としての自然におそれをいだき、その際限のない征服と、変形と、濫用によってのみその不安を押しのけ、自己の価値を確認しようとする動的な欲望の体系（近・現代社会）≫と≪人間自身を大自然の一部と見なし、一つのプラトーに達した状態で、充足を見出し得たほとんど動きのない欲望の体系（原始社会）≫（藤永『悲史』）の比較、及び「系譜学」は稿を改めて論じたい。

註6　同、p.249

(vii) アメリカ合州国にとって『アバター』の意味は何か？

私の子供の頃（一九六〇年代）にはテレビで西部劇が盛んに放映されていた。その中に出てくるアメリカ・インディアンというのは虫けらのように白人に殺されていくのであった。そのことに全く疑問を持たなかった。子供はテレビの洗脳に対して全く無力であることを今更ながら感じる。アメリカの本国では、六十年代ぐらいからアメリカ・インディアンの人々自身が抗議の声を上げ始め、インディアンを虫けらのように扱う西部劇はすっかり影を潜め、逆にインディアンを肯定的に描く映画が出現してくる。代表的なものは、『ソルジャー・ブルー』（ラルフ・ネルソン監督・一九七〇）、『小さな巨人Little Big Man』（アーサー・ペン監督・1970年）、『狼と踊るDances with Wolves』（ケヴィン・コスナー主演監督・1990）などである。

藤永茂氏は米国を批判的に研究してきた第一人者であり、こうしたインディアンを肯定的に描く一連の映画の系譜に『アバター』を位置づけて次のように辛辣に述べている。

《“Little Big Man”が1970年、“Dances with Wolves”が1990年、“Avatar”が2010年の映画ですから、アメリカの一般大衆は、20年ごとに、同じようなインディアン同情映画を観て、同じようにインディアン側について、白人（つまり自分たち）がやっつけられるのに歓声を挙げているということになります。これは一体どういうことでしょうか？

私は次のように考えます。アメリカの白人たちは、建国以来、先ずは、先住民の土地と資源を奪い、その数百万人のほとんどすべてを抹殺し、続いて、フィリピン、ハワイ、中米、南米に侵攻して原住民たちに同様の苦しみを与え続けています。ベトナム、イラン、アフガニスタン、イラクなども加えなければなりません。随分と悪いことをしてきた、今もしている、という罪の意識は、かなり多くのアメリカ白人の意識の底に沈潜していると思われます。それがこうした映画に面白い形で反応するのではありますまいか。つまり、これらの映画はアメリカ人にとって、Feelin、good映画なのです。映画を見ながら、可哀想な犠牲者を救ってあげる立場に自分の身を

置いて、しばし、「いい気持ち」になるのです。だからといって、こうした映画が、アメリカ人を見ない前よりもましなアメリカ人に変えて映画館から送り出すかというと、残念ながら、そうではないようです。同じような映画を２０年ごとに見ても、あいかわらず、自分たちの気に入らない人間たちに襲いかかるのをやめないのですから。≫[註1]

私の意見では、アメリカの政治を支配しているのは、多国籍大企業と軍産複合体とウォール街（金融資本）である。歴史家のハワード・ジン（読み継がれているA people's history of the Unitede Statesの著者）が言ったように、アメリカの民衆にとってエイリアンであるこれら少数の支配者によってアメリカの政治は動かされている。アメリカ大統領でさえ操り人形に過ぎない。したがって、好戦的な（武力で決着をつけようとする）アメリカの支配層と、アバターに心から共感できるようなアメリカ人は、やはり区別すべきではないかと思われる。

このことに関連して論じておきたいのは、この惑星がパンドラと呼ばれているのはなぜかという問題である。パンドラの箱とは、ゼウスがパンドラ（ギリシア神話の地上最初の女性）に、あらゆる災いを封じ込めて人間界に持たせてよこした小箱または壺のことで、これを開いたためあらゆる不幸が飛びだしたが、急いで蓋をしたため希望だけが残ったという。なにかの希望が暗示されているのではないだろうか？

それはマイノリティの団結であろうか？

アメリカ・インディアンが白人たちに圧倒された理由として、多数の部族に別れた彼等が白人に対して統一戦線を形成することができなかったことが挙げられる。ところがナヴィは、トルーク・マクトを乗りこなしたジェイクによって多数の部族【オマティカヤ族・騎馬族・イクラン族など十五部族】が団結して地球人たちの軍隊に立ち向かったのであった。

この解釈はそれなりに説得力がある。しかし私にはもう一つの希望が示されているように思われる。映画の最後のシーンであり、ポスターやＤＶＤのジャケットに採用されている映像、ジェイクの操縦するアバターがナヴィの共同体とエイワのエネルギーを使ってアバターではなくナヴィそのものになって目ざめた瞬間の目の映像で

ある。目覚めること、曇り無き目で現実を見ること、キャメロンがこの作品に託した希望はそこにかかっているように思われる。

註1　藤永茂氏のブログ『私の闇の奥』2010／06／16より一部抜粋。

（4）おわりに―アメリカ・インディアン運動について

ハリウッド西部劇に描かれた虫けらのようなアメリカ・インディアンのイメージは今ではアメリカ映画には到底許されないほど、アメリカ合州国におけるインディアンの地位には大きな変化が起きた。その変化は自動的に起きたのではなく、ＡＩＭをはじめとするアメリカ・インディアン自身の運動の成果である。

①アメリカ・インディアン運動の結成（一九六八年七月二九日）・・・「インディアンであることの誇りと自負」

ラッセル・ミーンズとならんで「アメリカ・インディアン運動　ＡＩＭ　American Indian Movement」の指導者デニス・バンクスが「インディアンであることの誇りと自負」に目覚めた時のことを語っている。

《一九六八年七月二十九日は、私たちインディアンが忍耐と屈辱と貧困の長い歴史から自力で立ち上がった日だった。ついに山は動き始め、変革が始まった。・・・インディアンはすぐれた民族なのだ。美しい精神を持つ民族なのだ。もはや私たちは誰にもインディアンを蔑視させはしない。**インディアンであることの誇りと自負**が私たちの心の中にはっきりと芽生えたのだ。この日、**私たちインディアンはアメリカの歴史を変える最初のステップを踏み出した**のだった。》註1

《これからの人生のすべてを、いま始まったこの変革運動に賭けよう。なんの迷いも恐れもなく私はそう自らに誓った。白人に騙され、撃たれ、死んでいったインディアンの酋長らの誇り高き精神（スピリット）が、時代を超えて私のうちに息づき始めたのである。／合衆国政府の土地収奪に断乎として抵抗し続けたため、捕らえら

れて処刑された酋長**クレイジー・ホース**。カスター将軍率いる第七騎兵隊を全滅させたために、最も危険なインディアンとして追われ続け、一八九〇年に射殺された**シッティング・ブル**。彼らが無念にもなし得なかった仕事を引き継ごう。たとえ、どんな困難に出合おうと私はこの道をまっしぐらに進むだけだ。≫[註2]

註1　デニス・バンクス・森田ゆり『聖なる魂』（朝日新聞社・一九八八・pp.128-129）
註2　同、p.129

②「大地と命のためのランニング」（一九八八年八月）

デニス・バンクスは一九五〇年代の終わり頃日本に米国軍人として滞在していたこともあり（「砂川事件」のときには立川基地の中から日本の反対運動を眺めていたこともある）、日本との縁の深い人である。またアメリカ・インディアンは反原発・反核兵器の運動にも関心が深く、次のような活動も行ったことがある。

≪一九八八年八月五日に、私【『聖なる魂』の著者森田ゆり氏・引用者註】はデニス・バンクスをはじめとする二十人のインディアン走者と一緒に、「大地といのちのためのランニング」に加わるため成田に着いた。彼らはアメリカ大陸を東から西へ三千六百マイル（約五千八百キロ）を走り抜けたばかりだった。／八月七日の原爆投下記念日の翌日に、「ラン」はヒロシマで日本の走者と合流して日本縦断の走行に入った。**目先の利潤追求だけを優先する企業と政府の決定が、空気、大地、水を汚し、生態系を破壊し、もはや取り返しのつかない危機を日本列島にもたらしている**その現状を訴えるために「ラン」は出発した。広島から愛媛の伊方原発へ、静岡の浜岡原発へ、茨城の東海村、青森の六ヶ所村再処理工場など、核汚染問題の焦点となっている地をめぐって、終着地の北海道の幌延まで丸一ヶ月間、三千キロを走った。幌延は大規模な核燃料廃棄物処理場の建設が始まっているところだった。そこでインディアン走者はアイヌの人々の出迎えを受け、「ラン」終了式はアイヌの祈りの儀式、インディアンの祈りの儀式をもって行われた。≫[註1]

註1　同・p. 294

③ウンデッドニー占拠抗議

ウンデッド・ニーの虐殺（サウスダコタ州一八九〇年一二月二九日）とは、リトル・ビッグ・ホーンの戦いで壊滅した第七騎兵隊の残党を含むフォーサイス大佐率いる四七〇名の騎兵隊が、スー族の女・子供・老人を含む約三〇〇名をホッチキス銃で無差別虐殺をした事件である。アメリカ・インディアンの大規模な虐殺の最後の事件であり、アメリカ・インディアンの組織的抵抗の終焉を示す事件とも言われる。このウンデッド・ニーの虐殺を目撃したスー族の祈祷師が回想して述べた言葉。

《今こうして、老いの丘の高みからあの頃の事を思い返すと、あの曲がりくねった峡谷に沿って、いたるところに折り重なり、散らばっていた女たちと子供たちの虐殺された体が、（・・・）ありありとまぶたに浮かんでくる。そして、あのとき血にまみれた泥の中で死に、雪嵐の中で葬られたものは、彼らだけではなかったのだ。一つの民の夢があそこで死んだのだ。それは美しい夢だった。（・・・）**くにの輪は壊れ、散り散りになってしまった。輪の中心は失われてしまった。聖なる木は、死んだ。**」（『ブラック・エルクは語る』（一九三二）より註1）

『アバター』において「聖なる木」である「ホーム・トゥリー」が打ち倒されたように、ウンデッド・ニーにおいてアメリカ・インディアンの「輪の中心」が失われ、「聖なる木」が死んだ、とブラック・エルクは語ったのであった。

それから八二年後の一九七二年ＡＩＭの活動家とその支援者たちがウンデット・ニーの一角を占拠し、ＢＩＡ（インディアン管理局）、ＦＢＩ（連邦捜査局）、州政府、米軍、ディック・ウィルソン【合州国のインディアン政策に協力する部族会議の議長で独裁的権力者であった】の私兵組織グーンズ【オグララ国守護隊】を相手に、七一日間にわたる武力攻防を演じた。全米を震撼させた「ウンデッド・ニー事件」である。戦車や戦闘用ヘリコプターからＦ４ファントム・ジェット戦闘機まで動員された、まさしく『アバター』の最後の戦闘場面を彷彿と

させる事件であった。「ウーンデッド・ニー占拠抗議」以降、合州国は次々とＡＩＭメンバーを連邦訴追し、あるいは暗殺した。一九七六年いっぱいまで、サウスダコタは「恐怖支配の時代」と呼ばれる内戦状態のまま、百人近いインディアンが殺されたと言われる。

註１　『聖なる魂』（p. 170 , p. 300）

④生命の環・・・人間と人間が、人間と自然が、人間と母なる大地が、一つの環（サークル）となって互いの生命を敬いつつ生きる

最後にデニス・バンクスの「生命の環」に関する発言に耳を傾けたい。

≪ＡＩＭはその誕生以来、インディアンの信仰の自由を求めて苦闘してきた。インディアンは長い間、自らの宗教を信ずること、儀式を行うことを禁じられてきた。白人たちは私たちにキリスト教を押しつけ、彼らの宗教と文化にインディアンを同化させるよう強いてきた。しかし、私たちは強制的同化を拒否し、自分たちの宗教と文化を保ち続けるために闘った。

ＡＩＭは政治運動である前に、まず精神（スピリチュアル）運動として急速に成長したのだった。多くのインディアン、および非インディアンが私たちの精神運動に加わった。多くのアメリカ人たちが精神の拠り所を失い、漂っていたのだ。

精神的であるということは宗教的であることとはちがう。それは**人間と人間が、人間と自然が、人間と母なる大地が、一つの環（サークル）となって互いの生命を敬いつつ生きること**に他ならない。インディアンは**環の力**を信じている。**サークルは、地上に生きる全ての物が、互いに深くつながりあって生命を営んでいることの象徴**である。それはどこまでも生を肯定する。だから私たちは、この生命のつながりの環が切れることのないように祈りを捧げるのだ。宗教の教義にとらわれるのではなく、**この生命の環の一部となって、他者を敬い、鳥を、木を、大**

地を敬うことが、精神性（スピリチュアリティー）の意味するところである。これがない社会は、たとえそれがアメリカであれ、ヨーロッパであれ、アジアであれ、アフリカであれ、決して正しく社会を運営し、導いていくことはできない。精神的な基盤のない社会に生きる人間は、ビジョンも方向ももつことができない。》（デニス・バンクス『聖なる魂』pp. 283-284）

ブラック・エルクが失われたと思った「**輪の中心**」を、デニス・バンクスは、**人間と人間が、人間と自然が、人間と母なる大地が、一つの環（サークル）となって互いの生命を敬いつつ生きる**「**生命の環**」として、肯定している。あのインディアンの酋長の言った言葉がよみがえってくる。「悠久たる歴史の前には、二〇〇年など取るに足らぬ。**やがてインディアンが必ず勝つ。**」

Keyword(s): Avatar, Comparative study of societies, Primitive society, Modern society